

タイトル	草庵の魅力：場所と建築に関して
著者	小野，恭平；ONO, Kyohei
引用	北海学園大学学園論集(171)：1-9
発行日	2017-03-25

草庵の魅力ー場所と建築に関して

小 野 恭 平

はじめに

古代から中世にかけて宗教界は空前の活況を呈した。しかしその一方で経済力を獲得した寺院は世俗化し、僧侶は修行や学問より蓄財に励み、名を競い、妻帯・飲酒・博打すら公然と行なうようになった。そして庶民は公役や税に苦しみ、貧しい者は家財を失い、妻子を売り、憂悲苦悩すること云うばかりなし（沙石集、8-23）という状況となった。そこで真摯な修行者たちは腐敗した寺を出た。草庵はそうした彼らの小さく粗末な住まい兼修道場だった。建築としては最低限のものである。しかし日本人はこの草庵を古来理想的な住まいとし憧れてきた。

・いつよりかすむべき山の庵ならむかつがつとまる我が心かな（拾玉集、慈円）

・ことしげさうき世のまざれ打ちすてゝすまばや山の奥の庵に（柳葉和歌集、宗尊）

近代では宮沢賢治も「野原ノ松ノ林ノ蔭ノ小サナ萱ヅキノ小屋」を理想の住まいと考えていた。

では人々は草庵の何に惹かれたのか。以下では中世の仏教説話や歌を資料としながら仏道修行者の草庵の魅力を場所と建築についてみてみたい。

1. 草庵の場所

草庵の多くは人里離れた山中の「木かげ、いと暗ふして、草深く、つた・かずら茂り合」（硯破）う人目につかない場所に結ばれていた。

・わが庵は峯の杉むら分け過ぎてそれとも知らぬ深山木の陰（玉吟集、藤原家隆）

・庭はすすき軒端は蔦に埋もれて霧の底なる山蔭の庵（権大納言俊光集、日野俊光）

従ってそこは極めて寂しい場所だった。

・とはれぬは岩ねの苔にあらはれて道たえはつる山かげの庵（続拾遺集、右衛門督基氏）

・かきこめしすそ野の薄霜枯れて寂しさまざるしばの庵かな（山家集、西行）

ではなぜそのような場所に草庵は営まれたのか。

①長明は『方丈記』で、京の家が大火・疫病・暴風・飢饉・地震といった天災に対して無力であるのに対し、人里離れた山中の草庵は大火に巻き込まれる心配や疫病に感染する恐れがなく、飢饉の時も山菜や木の実で飢えをしのぐことができる点ですぐれているという。また京では、特に

弱者は、何をしてもびくびくと人にへつらい、軽んじられ、心の休まる時がないが、山中では人がいないから自由に心安らかでいられるという。要するに山中は憂き世から隔離された安住の地だということである。

- ・跡たゆる岩のかけ路の奥の庵や世の憂きめ見ぬ住まいなるらん (拾玉集, 慈円)
- ・立ちわたる春の霞をたよりにて憂き世隔つる山のはの庵 (寂身法師集, 寂身)

②しかもそこは乱れた心を鎮めてくれる仏道修行の最適地でもあった。

- ・人にまじはる習ひ、高きに随ひて下れるを哀れむに付けても、身は他人の物となり、心は恩愛のためにつかはる。是、此の世の苦しみのみにあらず。出離の大きな障りなり。境界を離れんよりほかに、いかにしてか、乱れやすき心をしづめむ。(発心集, 1-5)

心を鎮めるとは心をすますことである。それは濁った水が澄んでいくように、乱れ騒いでいた心が落ち着き雑念がなくなることであり、仏道修行の核心である。

- ・百千万の仏を供養し奉りてもよしなし。心ひとつ澄まずば、いたづらにや施さん。たゞ夢をさます心のみこそ、まことの菩提ならめ。仏をつくり堂をたてんよりも、心を法界に澄まさんこそ、げにあらまほしくも侍れ。(撰集抄, 5-9)

山中が心をすますうえで最適な場所だったのは、主にはそこに心を乱す人間がいなかったからである。

- ・人を遠ざかる事、いみじく尊く侍る。何わざにつけても、ひとり侍るばかり澄みたる事はなし。昔の高僧の跡を尋ねれば、みなかやうにのみ侍るにや (閑居友, 上-6)
- ・げに、人も知らぬ境にあらんは、いみじく澄みわたりてぞ侍ぬべき。むげに近き所なれども、そのかみ真野の入江を見侍りしに、比良山おろし吹きすさみて、昔おほしき尾花が末に鶉いとあはれに聞こえしが、常に心にとゞまりて、人もとがめぬ山の麓に、鶉を友として、あやしの草の庵の身ひとつ隠すべき結びてみ侍ばや。さてまた、住みにくゝは、いづくにも行き隠るゝぞかし」など、常に覚え侍る也 (閑居友, 上-3)

③山中はまたその閑寂・幽閑によっても心がすんだ。

- ・所がら殊に澄みて覚え侍る。長山よもに廻りて、僅かに爪木こる斧の音の山彦ひゞき、峰の呼子鳥のひめもすに鳴きわたり、秋の草門を閉ぢて、閨に蔦のしげりて、虫のこゑ枕の下に聞こえけん。さこそ心も澄みていまそかりけん。(中略) 唐土の江州終南山、廬山の恵遠寺などの、閑なる様を聞くには、かしこにすむ身となどかならざりけん、口惜しく覚え侍り。大原、小野里、吉野の奥のすまゐこそ、あらまほしく覚えて侍れ。(撰集抄, 4-5)
- ・されば、章安大師(隋の天台宗第四祖)の詞かとい、「所の幽閑、これ大なる智識なり」とは。心は水のごとし。うつは物に随ひて、すみにごりの侍べきにや。あやしの我等にいたるまでも、太山のすまひとて、なんとなく世に交り侍しそのかみには似ず、心もすみて侍れば、実の智識にこそと覚え侍る。(撰集抄, 9-3)

閑寂な所に住んでいれば、自ずと心もひっそりと鎮まってくるということである。

④なお閑寂は山中の自然の興趣をも深めてくれた。長明は次のように述べている。

・もし夜しづかなれば、窓の月に故人をしのび、猿のこゑに袖をうるはす。草むらの蛩は遠くまきの鳥のかゝり火にまがひ、暁の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろほろと鳴くを聞きて、父か母かとうたがひ、峰の鹿の近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或はまた、埋み火をかきおこして、老いの寝覚めの友とす。おそろしき山ならねば、梟の声をあはれむにつけても、山中の景気、折につけて、尽くる事なし。(方丈記)

夜の静寂の中で鳥の声に耳をすませ、窓の月を眺め、埋み火を見つめていると、すべてがしみじみと心にしみてきて興趣が尽きないという。花を見ても同様だった。

・人も来ず心も散らで山かげは花を見るにもたよりありけり (山家集、西行)

・今よりは花見ん人に伝へおかむ世をのがれつゝ山に住まへと (山家集、西行)

⑤もちろん仏道修行者が閑寂や自然美に惹かれることは「要なきたのしみ」(方丈記)でしかなかった。が、自然はその清らかさによっても心をすませてくれたのである。『発心集』(6-12)と『西行物語』に登場する、野の花に心をすます聖の例を見てみる。

西行が東国行脚で武蔵野に分け入った時のことである。頃は八月十日あまり、月が昼のように明るい夜だった。色々な花が唐錦を広げたように咲き乱れ、露が月光に輝き、虫の声が風に乗って聞こえてくる捨て難い風情だった。我知らず引き込まれるように分け入って行くと、かすかに経をよむ声が聞こえてくる。不思議に思い路を辿ると、草の中に萩・女郎花を囲いにし、薄・かるかや・萩などで屋根を葺いた一間ばかりの庵が現われた。見ると、その中で老修行者が独り経をよんでいた。聞けば、昔、郁芳門院の侍の長であったが、女院亡き後出家して「人に知られざらむ所に住まむ志深くて」あちこちさすらった後、花のいろいろを縁としてこの野中に住みついたという。日々の食の事など聞くと、この花の中で世俗の営みも本意ではないので有るに任せており、みだりに人里に出ることもないという。西行はこうした聖の生き方に「いかに心澄みけるぞ、うらやましくなむ」と感動し、夜明けまで語りあって別れたという。花の清らかさが食の営みさえ有るに任せるという執らわれのない境地に導いてくれたのである。

⑥一方、山中の自然はその美を好くこと(数寄)によっても心をすませてくれた。

・数奇と云は、人の交わりを好まず、身のしづめるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふにつけて、常に心をすまして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも顕れ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に侍るべし。(発心集、6-9)

数奇とは、人との交わりを好まず、落ちぶれても気にせず、もっぱら花や月にのみ心を寄せることである。すると自ずと俗気が消えていき、曇りのない眼で世の中を見ることができるようになるので、無常の理や名利に執られることの無意味さもわかるようになる。それゆえ数寄は解脱に至る門出だと言うのである。

⑦山中の自然はまたその移り変わる姿によっても無常を教えてくれた。そしてそれによって名利

に執られることの無意味さがわかるようになり、心がすんでいくという。

- ・所のありさまもいたく澄みて覚え侍り。見侍りし比は、神無月の十日あまりの事に侍れば、月はかげする木々の無けれども、はれくもる光は一方ならで物哀れなるを。木の葉がくれに行く嵐の、かれ野の芒に弱りて、そよめき渡り、世を秋風のはげしくて、泪に染むる紅葉の、もろく散るさまなどにも、無常思ひ知られて、哀れなるぞや。されば、義浄三蔵は、「好みて所を求めよ」と宣ひ、知朗禅師は、「心は所によりてすむ」などこそその給ふめれと思出されて、哀れにも侍る哉。(撰集抄、3-9)

⑧さらに山中の自然は浄土観想のたよりともなっていた。

- ・憂き世思ふしばの庵の隙を荒み誘うか月の西にかたぶく(玉葉集、前大僧慈鎮)
- ・紫の雲もかくし待ち見ばや庵の軒にかかる藤なみ(新千載集、入道前太政大臣)

庵の隙間から見える月は西方浄土へ誘ってくれるようだし、藤の花は来迎の紫雲のように見えるという。長明も日野山の草庵について「谷しげけれど、西晴れたり。観念のたより、なきにしもあらず。春は藤浪を見る。紫雲のごとくして西方に匂ふ」(方丈記)と述べている。

要するに人里離れた山中は、憂き世から遁れることによって心を安らかにし、自然美を愉しみつつ心をすましてくれる仏道修行の最適地だった。

だから住み処が人に知られると修行者たちは更に山奥へと遁れていった。

- ・あらはれて我すむ山の奥にまた人にとはれぬ庵やむすばん(新後拾遺集、常磐井入道前太政大臣)
- ・しをりせで猶山深く分け入らむ憂きこときかぬところ有りやと(新古今集、西行)

すべてを埋め尽くす雪に閉ざされてしまうことさえ歓迎した。

- ・をりしもあれ嬉しく雪の埋むかなき籠りなと思ふ山ぢを(山家集、西行)
- ・風もなくよかはの杉は雪とちて木の下庵やすみよかるらん(東常縁集、常縁)

ところで草庵が結ばれた場所は、実際のところは人跡絶えた深山幽谷というわけではなかった。例えば西行の嵯峨の草庵も、『西行物語絵巻』(徳川黎明会本)を見ると、身の回りの世話をする使用人であろうか、子連れの里人の姿が描かれており、山中というより村はずれという感じである。聖たちは食を里人の施しに頼っていたから、深山に憧れながらも里との往き来が可能な所にとどまらざるをえなかったのである。

- ・世をのがるゝ人の有様、しなじなに侍れども、海の辺、深山のすまひは、殊に浦山しくも侍れども、さしあたっては、身一つたすくる糧のはかりがたさに、独居の太山のすまひも叶ひ難くて、世にふるぞかしな。(撰集抄、2-7)
- ・物あはれなる、かくれがの、まへは野べ、うしろは山路なれば、わらびをとり、ねぜりをつむも、つてよろしく、しきみ、つま木の、たよりもあり。里ちかくして、しかも人め、まれなれば、まことは、世をすて人の、もとむべき所なり(硯破、内閣本)

⑨だから彼らが実際に山深く入って行くのは往生を実行に移す時だった。中世の仏教説話はそう

して死んでいった聖たちのことを繰り返し語っている。次の『撰集抄』6-8の話はその代表的な例であろう。

昔、西行が信濃の国の佐野の辺りを行脚していた時のことである。花が面白く咲き乱れ、虫の音がすだく野の中に僅かに道らしきものがあつた。興のおもむくままに分け入って行くと秋草で結んだ庵があり、四、五十歳と思われる僧が坐禅をしていた。「何時から此処へ」と聞くと、「此の春より」と答えたまま後は無言。去り難い思いだったが日も傾いてきたのでそのまま西を目指して行った。すると険しい山の麓に川があり、そこに木の枝を差し掛けただけの庵があつた。見ると六十歳あまりの僧が坐禅をしている。しかしどこか様子がおかしいので近寄ってみると、端坐したまま眠るように死んでいた。驚いて先の僧に知らせに戻ったが、彼も眠るように息絶えていたという。

花が咲き乱れ月が澄む山中は浄土往生の最適地だった。それは都の豪華な阿弥陀堂、例えば「極楽に参りたる心地」がしたという金銀・螺鈿で飾られた道長の阿弥陀堂などよりはるかに優れた浄土への基地だったろう。

2. 草庵の建築

草庵がどのような建築だったかを代表的な仏教説話集で見ると次のようであった。

『発心集』：一間ばかりなる庵…4例、かたの如くなる庵…3例、少しき庵、僅かなる庵、夢の如くなる庵、身一つ入る程なる少さき庵…各1例。

『閑居友』：「あやしの（卑小な、粗末な）庵」…4例。

『撰集抄』：かたの如くなる庵…5例、かたばかりなる庵…3例、あさましき（みすばらしい）庵…2例、身一つ隠すべき庵、僅かなる庵、けしかる庵…各1例。

これらを見ると「かたの如くなる庵」が最も多く、草庵には或る種の型があつたように思われる。おそらくそれは「身一つ入る程なる」一間の庵で、粗末でみすばらしい最低限の建築だったであろう。なかには次のようなものもあつた。

- ・むしろ、こも、めぐりにひきまわして（閑居友、上-15）
 - ・すゝき、かるかや、萩、女郎花を手折りて庵結びて（撰集抄、6-8）
 - ・木の枝、木の葉などにて、とかく構えたる形ばかりなる庵に木の葉を敷きつゝ（撰集抄、2-7）
- いずれも周りを筵・薦、薄・萩、木の枝・木の葉などで囲っただけの乞食小屋そのもののような代物である。

このように草庵の多くは最低限のものだったから、露や時雨が漏れ、中には何もない貧寒そのものの住まいだった。

- ・わが庵はあらしのままに住みなして露も時雨ももらぬまぞなき（後撰集、入道二品親王性助）
- ・庵のうちすみ返りて、き給へる麻の衣の外は何も見え侍らず。（撰集抄、3-5）
- ・身に持ちたる物少しもなし。仏も経もなし。ましてそのほかの物、つゆちりもなし。（閑居

友、上-6)

無住(1226~1312)は仏道修行者の住まいは「風雪をふせぎ、病患を去る程の房舎ならば事たりぬべし」(沙石集、8-23)と言っているが、これでは病患を去ることさえ難しかっただろう。

しかし人々はこうした住まいを称賛した。

①その理由の一つを長明は『発心集』5-13話で次のように述べている。

・一、二町を作り満てたる家とても、これをいし(注…立派)と思ひならはせる人目こそあれ(注…人の目を意識してのことである)、誠に、我が身の起き伏す所は一、二間に過ぎず。その他は、皆親しき、うとき人の居所の為、もしは、野山に住むべき牛馬の料をさへ作りおくにはあらずや。かくよしなき事に身をわづらわし、心を苦しめて、百千年あらんために材木をえらび、檜皮・瓦を玉・鏡とみがきたてて、何の詮かはある。ぬしの命あだなれば、住む事久しからず。或いは他人の栖となり、或いは風にやぶれ、雨に朽ちぬ。況や、一度火事出でたる時、年月のいとなみ、片時の間に雲烟となりぬるをや。(発心集、5-13)

いかに豪華な家でも、いつ風雪に破れ、火事で煙になってしまうかも知れない。それなら余計な心配のいらぬ小さな家のほうが心安らかだというのである。長明は『方丈記』でも家というもの「はかなく、あだなるさま」を繰り返して述べ、そのような物のために心を悩ますことの無意味さを力説している。そして自分は「たゞしづかなるを望みとし、憂ひ無きをたのしみ」としているだけだから、心が安らかなことこそ最も重要であり、その点では草庵の方が宮殿・楼閣より優れていると言う。しかも長明は心さえ安らかなら、現実の家より想像上の家の方が優れているとさえ言う。実現するはずもない家を「寝殿はしかしか、門は何か」などと空想することは虚しいことのように思われるが、「此の世の楽しみは心を慰むるにしかず」だから、その点では実際の家より心安まる住まいだというのである。

②さて草庵はまた、その小さく壊れやすい姿が無常の嵐にじっと堪えているようで、「あはれ」なしみじみとした感慨をも与えてくれた。西行は在俗時代、東山にあった阿弥陀房の草庵を見て次のように述べている。

・いにしへころ、東山に阿弥陀房と申しける上人の庵室にまかりて見けるに、なにとなくあはれに覚えて詠める——しばの庵と聞くはくやしき名なれどもよに好もしき住まいなりけり(山家集、西行)

「しばの庵——東の間の住まい」と聞くと残念な名ですが、無常の世に相応しい、好ましい住まいに見えましたと詠んだもの。藤原実国も次のように詠んでいる。

・高野にまゐりて侍りけるに、奥の院に静蓮法師が庵室にまかりたりけるに、あはれに見え侍りければ、かへりてつかはしける。——たれもみな露の身ぞかしと思ふにも心とまりし草の庵かな(千載集、藤原実国)

無常のこの世にあっては誰もが露のように儚い身の上でしかありませんが、草庵もまた無常にじっと堪える、この世に相応しい住まいのようで惹かれましたというのであろう。いずれも草庵

の小さく・頼りない姿にしみじみとした共感を覚えている。

③草庵が評価されたのは、それが心すむ住まいだったからでもある。『撰集抄』7-10 話に登場する聖の住まいは「松（葉）をもちて上をふき、そばにもたてまわし」た貧寒なものだったが、作者はそこに「思ひ澄ませる」ものを見て「いとうらやましく、有らまほしき住家に侍り」と称賛している。次の例も同様である。

・何も持たぬこそ、ことにあはれに好もしく侍れ。かの天竺の比丘（維摩詰）の、坐禪の床のほかには何もなくて、客人の菩薩（文殊菩薩）のおはしたるに、木の葉をかき集めて、それに居させ奉りける事を見侍しより、この事はいみじく好もしく侍。（閑居友，上-6）

ではなぜ貧寒な住まいに心がすんだのか。

物を持たない「貧」は仏道修行の根本である。

- ・後世を思はん者は、糶糶瓶ひとつも、もつまじき物とこそ心えて候へ（一言芳談，俊乗房）
- ・淫事對治（注：退治），不浄無常（注：不浄觀や無常觀）は猶次なり。只貧を以て最と為す。（一言芳談，敬仏房）
- ・貧は菩提のたね，日々に仏道にすゝむ。富は輪廻のきづな，夜々に悪業をます。（一言芳談，恵心）

だから仏道修行者は最低限の家に住んだわけだが，そこに人々は物に執らわれないすんだ心を見たのである。

- ・西行上人，二見浦に草庵むすびて，浜萩折りしきたるようにて，あはれなるすまひ，見るも心澄むさま，大精進ぼさつの庵の，草を座としけるも，かくやとおほえき（西行上人談抄）

④ところで聖たちが粗末な庵に住んだのは，住への愛着を絶ってこの世を厭離しやすくするためでもあった。

- ・居所の心にはなぬはよき事なり。心にはなひたらんには，われらがごとくの不覺人は，一定執着しつとおほえ候なり。（一言芳談，明禪法印）
- ・高野の空阿弥陀仏の，御庵室のしつらひの，びんぎあしげにて，「すこしか様にしたらばよかりなむ」と，御たくみ有りける間，「さやうしつらひなさん」と，人申ければ，『いやいやあるべからず，是又厭離のたよりなり。よしと思ひて心とめては，無益なり』とおほせられける。（一言芳談，明遍僧都）

⑤しかも仏道修行者が厭離すべき対象は，物や家や憂き世だけでなく名聞（名声，名譽）も含まれていた。衣食住は目に見えるものだから，それらを絶つことは物理的に可能である。しかし名聞欲は心の中の問題だから，自らが自らの心に打ち勝つ難しさがある。しかも仏道修行者は人々から内実を伴わない尊敬や施しを受けやすいが，それは人だけでなく仏法をも偽ることだったから，その罪は大きかった。

- ・もし，人，世を遁れたれども，『いみじくそむけり』と云はれん，貴く行ふよしを聞かれんと思へば，世俗の名聞よりも甚し。（発心集，1-12）

『発心集』8-2話でも、さる山寺の徳高い聖と評判だった上人が生前、堂を建て、仏像を造り、様々な功德を積み、臨終の様子も見事だったので極楽往生間違いなしと確信されていたが、死後、その上人の霊が人に憑いて言うには、生前の数々の功德は名聞のためであったため天狗道に陥ってしまったこと、そして人々がこの寺や仏像を拝むたびに地獄の責め苦が増す、と語ったことが記されている。だから真摯な修行者たちは修行の様子を人に見られたり徳が知られそうになると身の毛もよだつばかりおののいた(『発心集』8-1)。また徳もないのに人から貴まれたり施しを受けると「衣は炎網となりて身を焦がし、食は熱輪となりて腹を穿たん事、必定」(明恵上人遺訓)と恐れた。

そこで名聞欲を絶つ一つの方法として採用されたのが、着る物、言動、住まいをわざと物乞いや物狂いのようにする方法であった。世の人から蔑まれ嫌われることによって名聞欲が起らないようにしたのである。彼らがそうした方法でいかに真剣に徳を隠そうとしたか、『発心集』1-10話に登場する聖の場合を見てみる。

最近のことだと言う。天王寺の辺りを乞食して歩く聖がいた。住所を定めることもなく「垣の根、木の下、築地に随ひて夜を明かす」乞食そのもので、次のような風体で歩きまわっていたという。

- ・布のつづり、紙衣なんどの、云ふばかりなくゆゆしげに(注…ひどく)破れはらめきたるを、いくらともなく着ぶくれて、布袋のきたなげなるに、乞ひ集めたる物をひとつに取り入れて、ありきありき是を食ふ。童、いくらともなく笑ひあなづれど、更にとがめ腹立つる事なし。いたくせたむる(注…いじめる)時は、袋より物を取り出だして取らずれば、童、きたながりて是を取らず。捨つれば、又取って入れつつ、常には様々のすぞろ事(注…わけのわからない事)を打ち云うて、ひたすら物狂いにてなむありける。(『発心集』1-10)

大勢の子供たちがまとわりつき、はやしたてる。あまりにひどいと布袋から食べ物を取り出して与えるが、もらった子供も汚ながつて捨ててしまう。それをまた拾っては袋に入れ、訳の分からないことを言いながら歩きまわるといふ具合で、まったく物狂いそのものだった。しかし或る事からこの聖が実は天台の教義に通じていることがわかり、菩薩が姿を変えて現れたかと貴ぶ人もでてきた。そこで聖は初めのうちは笑ってとぼけていたが、そのうちふと姿を晦ましてしまった。その後、年を経て人が語るには、隣国で物乞いをしながら暮らしていたが、最期は人も来ない大きな木の下で西を向いて合掌し、座したまま見事な往生をとげていたという。敢て物乞い・物狂いの風を装うことによって人から尊敬されないようにしていたのである。

要するに彼らが乞食小屋に住んだのは陰徳のためであった。その意味で草庵には最低の外観の奥に最も高貴な心が隠されていたといえる。人々はそのギャップに、より一層貴いものを感じたのであろう。

- ・げに、人にはつたなき物と思ひ下されて、心ひとつに思ひすまして侍らんには、いみじくすみ渡りてぞ侍べき(撰集抄、2-4)
- ・かやうに、事にふれて、物ぐるひにわざと振舞ひけれど、それにつけても貴きおぼえは、い

よいよ増りけり (宇治拾遺物語)

⑥しかも仏道修行者たちはこうした庵さえ軽々と捨てた。

・世を捨てゝすみこし山の庵をも心とまるとなをやいでけん (隣女集, 雅有)

・幾たびかゝくすみ捨てゝいでつらんさだめなき世に結ぶ仮いほ (風雅集, 夢窓国師)

定住すれば里人に貴まれ、衣食住にも困らなかっただろうが、それでは愛着や執られから自由になれない。だから捨てた。一遍が「住所をかまふるは地獄道の業なり」(一遍上人語録)と説き、生涯を諸国遊行の中で送ったのもそのためだったであろう。『撰集抄』5-7 話にそうした例が紹介されている。

粗末な麻の衣と本尊持経以外は何も持たない無一物の聖が、西山の麓に型の如くの庵を結び、ひっそり隠れるように住んでいた。しかしやがてその徳が世間に知られるところとなり、時の大臣家から結縁にと招かれることとなった。しかし使いの者が行ってみると、一首の歌を残し(すぎゆきし方もくやしゝしばの庵わがすみかとしてなにしたをりけむ) 何処ともなく姿をくらました後だった。「よしなきかりそめのやどを結び置きて、我身をここに置く故に、心にもあらぬ事を聞くことのむつかしさよ」と思い、捨てたのである。作者はこうした聖の生きざまを見て「我が身の外には物をもたで、僅のすみかをさへくやしむ程の心ばせ、げに、さぞいさぎよかりけむ。げにげにうらやましくぞ侍る。」と感動している。同じく『撰集抄』5-9 話の聖(かつては山階寺の貫首を務めた真範僧正)も 50 歳を過ぎた頃から世を厭う志が深くなり、本寺を離れて志賀の山中に隠遁したが、人里に近かったため「この庵の内に貴げなる聖のおはしけるぞ」と噂がたつようになり、多くの人が結縁に訪れるようになった。そこで「いづちともなく迷ひ出て」宇津の山中に移ったのだが、ここでもまた人々から「まことの道心者にこそ」と貴まれ、庵や食事の世話などされるようになった。そこで再び姿を隠してしまったのであった。その後、町中で鈴を振り振り歩いているのを目撃されることもあったが、やがて杳として行方知らずになってしまったという。こうした見事な失踪は『発心集』でも「かき消つ様に失せて、行方もしらず」(1-1)、「きと立ち出づる様にて、やがて、いづちともなく隠れにけり」(1-2)、「其のままに跡をくろうして、終に行方も知らずなりにけり」(1-3) のように繰り返し語られている。簡潔な記述ながら、風のように軽々と捨てていった一所不在の聖たちのすみきった心、自由な境地への憧れが伝わってくるようである。

結

中世の人々が草庵に惹かれたのは、その場所が憂き世を遁れた心安らかな場所であったこと、また閑寂や自然美を愉しみつつ心をすませ、浄土往生をも遂げることができる仏道修行の最適地だったからである。またその建築に、京の広壮・豪華な住まいや民衆の犠牲のうえに建設された大寺院にはない、すみきった心の安らぎを見たからでもあった。要するに草庵は真の平安を与えてくれる住まい兼修道場として憧憬されていたのである。